

# 東南アジアの港市国家におけるイスラームの展開と巡礼

弘末雅士

## 1. はじめに

東西海洋交通路の要衝に位置した東南アジアは、古くから中国やインド、ペルシアやアラブさらには西欧などの東西世界を介在する役割を果たしてきた。東南アジアの主要河川の河口付近には、風待ちや中継交易さらには地元産品を輸出するための港市が、各地に登場した。古くは7世紀から11世紀初めまで栄えたシュリーヴィジャヤの王都パレンバン、交易活動の活性化した15世紀から18世紀に隆盛したパサイ（北スマトラ）、マラッカ、アユタヤ、ペゲー（下ビルマ）、アチェ、バンテン（西ジャワ）、ジョホール、マカッサル（南スラウェシ）、リアウ（ピンタン島）などはその典型的事例である。これらの港市は、同時に王都となり、地元社会の結節点となり、外部世界への窓口となった。こうした港町における交易活動を権力基盤とした国家を、東南アジア史では「港市国家」と呼ぶ〔鈴木 1998: 193-214, 弘末 2004〕。

東西世界からの商人や来訪者を幅広く抱えた東南アジアの港市は、多様な人々が逗留するコスモポリスとなった。15世紀後半から1511年にポルトガルに占領されるまで隆盛したマラッカはその典型である。ポルトガルが占領した直後のマラッカでは、84の異なる言語が話されていたことが記されている〔ピレス 1966: 455〕。また17世紀後半にアユタヤを訪れたフランス国王ルイ14世の使節は、その地で43ヵ国の人々より挨拶されたという〔ショワジ／タシャール 1991: 186〕。遠隔地交易のネットワークを保持し、また港市の社会統合をはかるため、港市支配者は、イスラームや仏教、中華秩序などの広域秩序原理の受容に熱心となった。13世紀終わり以降の東南アジア島嶼部におけるイスラームの普及や14世紀以降の大陸部における上座仏教の隆盛は、こうした状況を反映している。またマラッカやアユタヤはともに、熱心に中国にも朝貢した。

広域秩序世界の中心地から見ると、東南アジアはしばしば、イスラーム世界や中華世界の周縁に位置づけられる。他方、東南アジアから見ると、こうした異なる秩序世界の間を媒介できることが、港市繁栄の重要な条件であった。このため、この地の支配者たちは、中華秩序やイスラームの秩序を熱心に維持しつつ、それらを包括できる原理を模索した。東南アジアにおけるイスラームの展開やムスリムの巡礼にもその特質が反映した。

## 2. 東南アジアにおけるイスラームの展開

ムスリム商人は、7世紀終わりごろから東南アジアに來航していたと考えられるが、現地人支配者の改宗は、インド洋交易がムスリム商人の主導のもとに行われるようになった13世紀終わり頃から始まる。インド洋の入口となる北スマトラの港市支配者の間で、その頃からイスラームを受容しはじめたことが、旅行者の記録からうかがえる〔D' Ancona 1997: 115, ポーロ 1971: 151〕。アラブ、ペルシア、南インド、ベンガルそして中国より來航し、遠隔地交易に携わるムスリム商人たちにとって、イスラーム法にもとづく商業取引や契約文書の慣習を共有できることは、商業活動を進める上できわめて重要であった〔Johns 1993: 49〕。

北スマトラにおいてその中心的役割を担ったのは、マラッカ海峡の入口に位置し、龍腦や金そして胡椒の

輸出港となったパサイであった。13世紀終わりに成立したこの王国は、14世紀・15世紀前半に繁栄する時期を迎えた。16世紀初めにマラッカを訪れたポルトガル人のトメ・ピレスが得た情報によると、15世紀初めのパサイには、ペルシア人、ベンガル人、アラブ人の多数の富裕なムスリム商人が居住していたという [ピレス 1966: 397]。彼らのコミュニティは、アラブ人のイスラーム宗教教師（モウラナ）をそれぞれ連れてきていた。パサイの支配者のイスラーム受容は、王がイスラーム世界の一員であることを掲げてより多くの商人を引きつけ、かつインドやペルシア、アラブといった多様な出身地よりなる逗留者を統合するためであった。多様なムスリム商人が滞在できる空間を形成するためには、当初から東南アジアの港市支配者の志向するイスラームは、「正統」なものでなくてはならなかった。この王国を1345年に訪れたイブン・バトゥータによれば、この地のスルタンが敬虔なムスリムで、金曜日ごとの礼拝を欠かさず、左右にシャーフィイー派のイスラーム法官や学者たちを従えていることを記している [イブン・バトゥータ 2001: 395-396]。シャーフィイー派法学は、イスラーム・スンナ派の法理論にもとづく四大法学派の一つで、当時のインド洋海域世界における国際イスラーム法として広く認められていた [家島 2001: 31]。

パサイはしかし、インド洋に近接したため、波が高く、しばしば船舶の沈没を招いた。来航する商人にとっては、より波の穏やかなマラッカ海峡域の港の方が、東部インドネシアの丁字やナツメグなどの香料も入手しやすくなり、また中国などの東アジアとの取引にも便利になるので、好都合であった。14世紀終わりに成立し、15世紀中葉から1511年にポルトガルに占領されるまで、東南アジアで最も繁栄する港市となり、また東南アジアのイスラーム化に大きな役割を果たすマラッカは、こうした状況下で台頭した港市であった。

マラッカ王室のイスラーム受容は、第2代王イスカンダル・シャー（在位1414-22年）の時代にまずなされた可能性が高い。先に紹介したトメ・ピレスの記述によれば、マラッカ王はパサイ王と良好な関係を形成することができ、パサイより多くのムスリム商人達がマラッカに移り、王もイスラームに改宗し、パサイの王女と結婚したとされている [ピレス 1966: 399]。王を含め宮廷規模でイスラーム受容がなされたのは、第5代のムザファール・シャー（在位1445-56年）の時代であった。1405-33年になされた鄭和の遠征の後、中国からの来航船が減ると、西方世界から来航するムスリム商人の役割はますます重要になった。

このムザファール・シャーの時代から1511年までが、マラッカの全盛期であった。マラッカは、西アジアやインドと東アジアとを結ぶ東西交易の中継港となるとともに、ビルマ、タイ、スマトラ、ジャワ、東部インドネシア、カリマンタン、ルソン、チャンパなど東南アジア域内を以前にも増して緊密にリンクさせることとなった。マレー半島、スマトラ東岸、ジャワ北岸、東部インドネシア、ブルネイ、フィリピン南部やマニラのイスラーム化は、こうしたマラッカの交易ネットワークにより進展した。

パサイ同様、マラッカにおいてもアラブ人宗教家が重用された。マラッカ王国の王統記（『ムラユ王統記』）は、王の改宗がアラブ出身の宗教家によってなされたことを唱えている [Abdul Rahman Haji Ismail 1998: 121-128, Brown 1970: 43-49]。またマラッカがポルトガルに占領された後、ムスリム商人を引きつけ繁栄した北スマトラのアチェも、アラブやメッカで学んだ中東出身の多くのウラマーを重用した。このほか、バンテンやマカッサル、マレー半島のパタニでも、アラブ出身の法学者が重視された [Reid 1993: 184]。

### 3. 東南アジアのムスリムのメッカ巡礼

16世紀後半から17世紀中葉にかけて東南アジアの交易活動は、香辛料取引の拡大、ヨーロッパ人来航者の増加、中国の海禁策の緩和、そして日本人商人の海外進出により、一層活性化した。

16世紀に入るまで東南アジアの香辛料の主要な輸出先は中国であったが、1600年までにその輸出先が西方世界（ヨーロッパ）へと変化していった。東南アジア海域に参入したポルトガルは、マラッカを占領した後、

マルク諸島のテルナテにも拠点を構え、マルク諸島—マラッカ—カリカット—喜望峰のルートで、香辛料の独占取引をもくろんだ。一方、ポルトガルの独占貿易に反対したアジア人商人達は、マラッカを避け、北スマトラのアチェに寄港する者や、さらにスマトラ西岸を経てスダ海峽に至り、バンテンに寄港する者が増えた。また16世紀初めにはオスマン帝国がアラビア半島南部を勢力下に置いたので、1530年代よりアチェは、インド洋経由で直接紅海にまで船舶を派遣し、オスマン帝国と交渉を持つに至った。アチェは、ポルトガルに対抗して紅海・地中海ルートで香辛料取引を司ったオスマン帝国に胡椒を送り、オスマン帝国は返礼としてアチェに兵士や武器を送った [Boxer 1969: 415-416]。

また16世紀中葉以降、中東から東南アジア島嶼部へ来航するウラマー（イスラーム学者）の数も増えていた。16世紀後半のアチェのスルタン・アリ・リアーヤット・シャー（在位1568-75年）は、エジプト出身でメッカで活躍していたシャーフィイー派のウラマー、ムハンマド・アズハリエを迎え入れた。彼は、1630年に没するまでアチェに滞在した。また次のスルタン・マンスール・シャー（在位1577-86年頃）は、メッカからシャイフ・アブドゥル・カイルとムハンマド・ヤマニー、そしてグジャラートからムハンマド・ジャイラニを迎え入れた [Hoesein Djajadiningrat 1911: 160-161, Schrieke 1957: 243]。

こうして中東との交流が深まると、東南アジアのムスリム自身によるメッカ巡礼も盛んになる。16世紀終わりごろより、スマトラ出身者でメッカで学んだ後にアチェに帰還し、活躍する学者が現れた。北スマトラ出身のハムザ・ファンサーリーは、16世紀の終わりからメッカに滞在してイブン・アラビーの流れをくむ神人合一の神秘主義の教義を修めた後、東南アジア海域世界で神との合一に到達することの重要性を、マレー語の詩で表現し、教義を広めた。同じく北スマトラの出身のシャムスディン・パサイは、メッカに滞在して神秘主義を修めた後、アチェのスルタン・イスカンドル・ムダ（在位1607～36年）に重用され、王権の増強に寄与し、外務大臣としても活躍した。またアチェ出身のアブドゥル・ラウーフは、17世紀中葉にメッカでの20年にわたる滞在を終え帰還し、アチェのスルタンに重用され、司法制度の整備に貢献した。アブドゥル・ラウーフは、『クルアーン（コーラン）』の注釈書のマレー語完訳を成し遂げ、彼の注釈書は、その後広く東南アジアで用いられるに至った。こうしてアチェは、東南アジアのメッカ巡礼者の赴く玄関口となり、また中東からのイスラーム学者や東南アジアのメッカ巡礼帰還者を多数抱え、「メッカの玄関口」あるいは「メッカのヴェランダ」と呼ばれた [中村 1991: 200-202]。

このほか、東南アジアの支配者自身も権威付けのために、メッカに使節を派遣した。1638年バンテン王アブドゥル・カディルは、メッカに使節を派遣してスルタンの称号を得た。翌年には中部ジャワのマタラム王アグンもメッカに使節を派遣し、41年にスルタンの称号を得た。

東南アジアのムスリムのメッカ巡礼者数は、蒸気船が就航する以前の19世紀初めの時期に、およそ千人ほどであったという記録が残されている [Anderson 1840: 164]。おそらく17世紀や18世紀においては、年間数百人の巡礼者がいたものと推定される。アチェは、その出発港として主要な役割を担った。蒸気船が就航し始めると、東南アジアからのメッカ巡礼者の数は増加し、1880年代には年平均がおよそ4600人、1890年代になるとおよそ7500人の巡礼者があったことが統計からわかる [Vredembregt 1962: 93, 148-149]。1884—85年にかけてメッカに滞在したスヌック・ヒュルフローニエによれば、当時のメッカにはジャワーと呼ばれる数千人からなる東南アジア出身者のコミュニティが存在し、地元のアラブ人コミュニティ以外では、最大数であったという [Snouck Hurugronje 1931: 213-292]。

#### 4. イスラームと港市支配者の世界観

このように東南アジア島嶼部の港市支配者は、熱心にイスラームを信奉した。だが先に述べたように、東

西世界からの商人を幅広く抱えた支配者は、同時に他の広域世界秩序に関心を払わねばならなかった。パサイは、西方世界から多数のムスリム商人を抱えるとともに、中国とも交流を持ち、元や明に朝貢した〔馬敏 1998: 76-80, イブン・バットゥータ 2001: 403〕。マラッカも同様である。ムスリム商人を多数寄港させたのみならず、明に朝貢し、中国人商人を多数引き寄せた。またアチェにも、多数の中国人商人や東南アジア大陸部の上座仏教国の商人が寄航した。

元来イスラームは、さまざまな宗教や秩序原理を奉ずる人々の間で展開した原理である。東南アジアの港市におけるイスラームも、中華秩序や仏教を無視できない港市支配者の間で展開をとげた。すべてが神に帰一することを説くイスラーム神秘主義や、婚姻や血縁の伝承は、支配者にとり重要な統合原理となった。パサイの建国を語る『パサイ列王伝』は、初代王のムラ・シルが、夢でムハンマドの啓示を受け、その後メッカからやってきたシャイフ・イスマイルにより、イスラームに改宗したことを語っている〔Hill 1961: 55-58〕。またマラッカの建国を語る『ムラユ王統記』は、マラッカ王家がアレクサンダー大王の血統を引き、夢でムハンマドの啓示を受けたラジャ・トゥンガが、アラブ人のサイイド・アブドゥル・アジズによってイスラームに改宗したことを述べている〔Abdul Rahman Haji Ismail 1998: 121-128, Brown 1970: 43-49〕。いずれも、夢でムハンマドから直接的啓示を受けたことを、その王権の正統性に据えている。

またアレクサンダー大王は、『クルアーン（コーラン）』において不信徒を懲らしめるために強い力を有する「二本角 Dzul-Karnain」を持つ聖人として登場し、アラブやペルシアのムスリムの間では、ヨーロッパをはじめ西アジアや南アジアさらには中国にも広く覇権を確立したとされる英雄であった〔Winstedt 1938: 10-23, 山中 2003: 445-453〕。『ムラユ王統記』では、アレクサンダー大王の血統を有し、インドを征服したラジャ・チュラン（チョーラ王）が、シンガポールまで遠征し、海に潜って海の王の娘と結婚し、その結果誕生した息子が、マラッカ王家の始祖となったとされている〔Abdul Rahman Haji Ismail 1998: 67-92, Brown 1970: 1-21〕。またマラッカ王家の血統を有したジョホール王国の後継者となったジョホール・リアウ王国も、ジョホール王の祖先がアレクサンダー大王の息子で、西のルム王（オスマン帝国のカリフ）と東の中国王との兄弟であると唱えた〔Marsden 1783: 338-339〕。またアチェの全盛期を築いたスルタン・イスカンドル・ムダ（在位1607-36年）は、アレクサンダー大王の再来を自称した。イスカンドル・ムダの時代に編纂された『アチェ王統記』は、アチェの繁栄がオスマン帝国のカリフよりも賛美され、イスカンドル・ムダが古のアレクサンダー大王の再来であると讃えられたという〔Teuku Iskandar 1958: 167〕。

ムスリムとなった東南アジアの支配者たちは、自らを世界の中心的権威のひとつに位置つけていることがわかる。このため、東南アジアのムスリムにとって、ムハンマドがアッラーから啓示を受けたメッカのみが巡礼地として重要になるだけでなく、隆盛した支配者の墓所やその王権の強化に貢献したウラマーたちの墓所も同様に重要であった。アチェのスルタンにとって、イスラームの先進地であったパサイは重要な巡礼の場所であった。またジャワの権力者にとって、ジャワのイスラーム化に貢献した「九聖人」と呼ばれる聖者達の墓所は、権威高揚をはかるために欠かせぬ信仰対象となった。今日においても、「九聖人」の墓所は、ジャワ人の重要な巡礼地である。またマラッカが隆盛しだすと、この地は東南アジアのイスラームの中心地となった。後にジャワに成立したマタラム王国の王統記『ジャワ国縁起』によれば、ジャワの「九聖人」のうちのスナン・ボナンとスナン・ギリが、先達のワリ・ラナンにメッカ巡礼の希望を伝えると、まずマラッカに行き、そこで修行するように勧められたという〔Olthof 1941: 22〕。またマラッカ全盛期のスルタン・マフムード・シャー（在位1488～1511年）は、後のポルトガル人の記録によると、マラッカのなかに新たなメッカを作ろうとしたという〔ピレス 1966: 422〕。

イスラームを受容した東南アジアの港市支配者は、自らをイスラーム世界の周縁部の存在に位置づけるのではなく、世界の中心的権威であることを唱えたのである。

## 5. おわりに

東西海洋交通路の要衝に位置した東南アジアの港市は、中華やイスラーム、仏教などの広域秩序圏を介しつつ、多様な出身地の商人を抱えた。異なる広域圏を仲介できることが、港市の繁栄にとって重要であったため、港市支配者はそれぞれの広域原理を尊重しつつ、独自の世界観を形成した。イスラームを受容した港市支配者も、例外ではなかった。彼らはイスラームを熱心に信奉しつつ、自らを東西世界を介在する中心的権威に位置づけようとした。

メッカ巡礼は、イスラームの広域秩序圏を保持するために重要な役割を果たした。しかし、東南アジアの支配者には、メッカを中心とする秩序圏を維持することのみが重要であったわけではない。東アジアからの商人をはじめ、非ムスリム中国人やインド人さらにはヨーロッパからの商人も多数抱えた東南アジアの港市支配者は、より直接的にムハンマドやイスラームの聖人の権威に与ろうとした。そのため、こうした聖者達のゆかりの場所や墓所は、重要な巡礼の対象となった。前近代の東南アジアのムスリムの巡礼活動を探るとき、この地域のイスラームの展開が王権のあり方と緊密に関わっていたことが明らかになるのである。

### 参照文献

- D' Ancona, J. 1997. *The City of Light*, D. Selbourne (tr.), New York.
- Anderson, J. 1840. *Acheen and the Ports on the North and East Coasts of Sumatra*, reprint, Kuala Lumpur, Singapore, London and New York, 1971.
- Abdul Rahman Haji Ismail 1998. "Teks / Text of Raffles MS. No. 18", Cheah Boon Kheng (ed.), *Sejarah Melayu The Malay Annals*, Kuala Lumpur.
- Boxer, C. R. 1969. "A Note on Portuguese Reactions to the Revival of the Red Sea Spice Trade and the Rise of Atjeh, 1540-1600", *Journal of Southeast Asian History*, vol. 5.
- Brown, C. C. (ed.), 1970. *Sejarah Melayu or Malay Annals*, Kuala Lumpur, London, New York and New York..
- ショワジ／タシャール, 1991. 『シャム旅行記』二宮フサ・鈴木康司訳, 岩波書店.
- Hill, A. H. (ed.), 1961. "Hikayat Raja-Raja Pasai", *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 33, part 2.
- 弘末雅士 2004. 『東南アジアの港市世界 — 地域社会の形成と世界秩序』岩波書店.
- Hoesein Djajadiningrat 1911. "Critisch overzicht van de in Maleische werken vervatte gegevens over de geschiedenis van het soeltanaat van Atjeh", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, vol. 65.
- イブン・バットゥータ 2001. 『大旅行記』6, イブン・ジュザイイ編, 家島彦一訳注, 平凡社.
- Johns, A. H. 1993. "Islamization in Southeast Asia: Reflections and Reconsiderations with Special Reference to the Role of Sufism", 『東南アジア研究』31巻1号.
- 馬歙 1998. 『中国人の南方見聞録 — 瀛涯勝覽』小川博編, 吉川弘文館.
- Marsden, W. 1783. *The History of Sumatra*, reprint of the 3<sup>rd</sup> ed., Kuala Lumpur, New York, London and Melbourne, 1966.
- 中村光男 1991. 「東南アジア史のなかのイスラーム — 秩序と変革」石井米雄編『講座東南アジア学4 東南アジアの歴史』弘文堂.
- Olthof, W. L. (ed.), 1941. *Babad Tanah Djawi in proza Javaansche geschiedenis*, The Hague.
- ピレス, トメ 1966. 『東方諸国記』生田滋・池上岑夫・加藤栄一・長岡新治郎訳・注, 岩波書店.

- ポーロ, マルコ 1971. 『東方見聞録』2, 愛宕松男訳注, 平凡社.
- Reid, A. 1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, vol. 2: Expansion and Crisis, New Haven and London.
- Schrieke, B. 1957. *Indonesian Sociological Studies*, part 2, The Hague.
- Snouck Hurgronje, C. 1931. *Mekka in the Later Part of the 19th Century: Daily Life, Customs and Learning. The Moslems of the East-Indian Archipelago*, Leiden and London.
- 鈴木恒之 1998. 「東南アジアの港市国家」『岩波講座世界歴史13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店.
- Teuku Iskandar 1958. *De hikajat Atjéh*, The Hague.
- Vredembregt, J. 1962. “The Haddj: Some of Its Features and Functions in Indonesia”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, vol. 118.
- Winstedt, R. O. 1969. *A History of Classical Malay Literature*, Kuala Lumpur, Singapore, New York, London and Melbourne.
- 家島彦一 2001. 「イスラーム・ネットワークの展開」『岩波講座東南アジア史3 東南アジア近世の成立』岩波書店.
- 山中由里子 2003. 「アラブ・ペルシア文学におけるアレクサンドロス大王の神聖化」『国立民族学博物館研究報告』27巻3号.